モンゴル国の「競馬ウマ」にみる聖性についての研究
— ナードム祭に参加する「競馬ウマ」の調教法を事例として —

井 上 邦 子*

Holy of the Mongolian racehorses :
A case study of the training method of the racehorses in Naadam-festival

INOUE Kuniko

Abstract

They hold the horse racing in “*u r a a n c a p (caGan sara)*” — New Year’s festival in the old calendar — and sometimes hold it for the tourism. Among these horse racing, it is the most popular that held in Naadam-festival — the traditional summer festival with the horse racing, Mongolian-style wrestling and the archery — in Mongolia.

In a case of the horse racing in the national Naadam-festival at a capital, Ulan Bator, about 400 horses are entered for the race, the riders are children from 5 to 12 years old. The horses are classified according to their age, and run a race from 10 to 30km. The horses are gathered at the goal point at first, then a herd of the horses are moved to the start point at a trot. Finally, they turn in that place, and come running back the goal point. The best five horses are named “the five of *a й p a r (ayiraG)*” — “*a й p a r*” is the liquor made from milk of horses —, they are blessed and are poured “*a й p a r*” on their back.

At present, they held the horse racing as “the sports festival of nation”. The horse racing, however, has the aspects of the ritual, originally. The former researchers have interpreted the horse racing of Naadam games as “*o b o o (obu)*- festival” — the ritual for worship of the earth — or the ritual of sacrifice. It is true that Naadam- festival is held for “the sports festival of nation” nowadays, but, I think the element of the ritual in Mongolian horse racing is kept in Mongolian people feeling toward race horses, because they worship the racehorses as the especially animal. The racehorses are the objects of belief in Mongolia, because they are buried at “*o b o o (obu)*- mound” that is for worship of the earth, when they died.

By the way, many case studies of holy animal reported from every corner of the world. But the aspect of holy may vary with the context in which the animal live. If that is the case, how do I grasp the concept of holy towards the racehorses in Mongolia?

I examine this paper as follows; ①making clear about horse culture in Mongolia and horse racing in Naadam-festival ②report about the skill to select and train the racehorses ③studying about the aspect of racehorses holy.

By the way, I study this paper on the basis of the data for six times field works from 1995 July to 1998 July.

In the first place, the nomads in Mongolia think the horse have closer relationship with human being than the other domestic animals. Based on the horse culture above mentioned, “*у я а ч и н (uyaGchin)*”, he is a technical nomad keeping the racehorses, trains the horses most effectively according to the lineage and the character of each horse. For example, “*у я а ч и н (uyaGchin)*” gives the text of a sutra, “*г и й н г о о (geyin Goo)*” to the horses, and furthermore, he takes care of the horse by the special cloth for courtesy. After that, the simple horse becomes the racehorse. When the training succeeded in this way, it gives full play to the racehorse’s ability, and they thought the racehorse is given the holy.

* 日本体育大学大学院

Interestingly holy of racehorse given by the skill of “*уяа чинн* (*uyaGčin*)” doesn't maintain. The racehorse is put out to grass like the others domestic animals again after the Naadam-festival. This shows the fact that there is “holy cycle of racehorse”, they have their own way of training and giving holy to the horse on the basis of traditional view of Mongolian nomads. Accordingly, I think the racehorse may be defined as the animal for sacrifice while being alive at present.

In current Mongolia, holy of the racehorse still exists through Naadam-festival, which is placed as the national sports festival. Because the holy of racehorse is based on the traditional Mongolian culture, that contains the manner of sacrificing the racehorse to “*о в о о* (*obu*)”, and the skill of “*уяа чинн* (*uyaGčin*)”. People in Mongolia awe the holy of racehorse, enjoy yearly Naadam-festival and pray at “*о в о о* (*obu*)- mound”. So the essential foundation of horseracing is held fast by traditional culture supporting the holy of racehorse, even if horseracing of Naadam-festival modernize.

Key words; Mongolian horse racing, holy of the racehorses, the training method

キーワード；モンゴル国の競馬、「競馬ウマ」の聖性、調教法

はじめに

現在、モンゴル国における競馬¹⁾のなかでも、特にナーダム祭の競馬は、牧畜作業が一段落する夏営地滞在中の「遊び²⁾」として、相撲、弓射とともに人々の関心を集めている。そのナーダム祭も、モンゴル国が社会主義時代を通過し、1991年頃より市場経済を受け入れ始めると、「伝統」の語られ方や儀礼の様式が変容するようになった。例えば、社会主義時代のモンゴル国は、チンギス・ハーンを英雄視することを禁じていたが、解放後は国民の象徴として位置付ける方針を打ち出しているように、ナーダム祭においても同様の変容がみられる。競馬もその例外ではない。つまり、社会主義時代と、市場経済が導入されはじめる1991年以降では、競馬にも明らかな変化が認められるのである。

すでに筆者は、国民国家形成過程における競馬の変容の事例について論じたことがある³⁾。しかし、実際の競馬は、こうした政治的側面からみた変容のみでは語りつくせないものが残る。とりわけ競馬に対する人々の心情には、「国家の現状に左右される儀礼」という視点のみでは、説明が不十分である。人々の暮らしのなかで伝承されてきた「生きた記憶」は、比較的不易な要素を残していると考えられるのである。

もともとモンゴルの競馬は、儀礼的要素の強いものであった。ナーダム祭はその起源を、土地神を祀る「オボーの祭り」に求めることができ、競馬はそこで行われてきたといわれている。大林太

良⁴⁾もまた、モンゴルの競馬と古代インドの供犠儀礼との関連を述べている。それによると、古代インドの馬供犠（アシュヴァメダ）の牧畜民文化要素が、祭儀的競馬という形で、アルタイ系諸族に保存されているという。また、ウノ・ハルヴァ⁵⁾も、アルタイ系諸族のクミス（馬乳酒）の祭りでは、ウマやヒツジの供犠が行われており、そこでは相撲・弓とならんで競馬が行われていた事例を紹介している。

このように、もともと儀礼の場で行われていたと考えられる競馬が、こんにちでは、「国家のスポーツの祭典」の一競技として催されている。しかし、競馬が「国家のスポーツの祭典」となったとはいえ、競馬の儀礼性は全く払拭されたわけではない。それどころか、「競馬ウマ⁶⁾」に寄せる人々の心性のなかに、その原型が厳然として温存されているように思われる。例えば、1991年に、ナーダム祭に優勝した「競馬ウマ」が、交通事故で亡くなったときのことである。人々は、事故を起こした運転手に厳重な処罰を求めて、大規模なデモを起したのである。その一件からでも明らかに、こんにちでもなお、「競馬ウマ」は敬意をもって人々に受け入れられている存在なのである。さらには、亡くなった「競馬ウマ」が、「オボー」と呼ばれる信仰の対象である塚に祀られることや、「競馬ウマ」の鞍などの道具をまたぐことをタブーとしていることから明らかである。このように、モンゴル国の人々にとって、「競馬ウマ」は信仰の対象ともいべき神聖視される存在であるのだ。

一方で、聖別された動物の事例は、世界の各地から数多く報告されている。しかし、その聖別の

様相は、動物が生きる文化の文脈によって、様々な位相で、多様に意味付けされているはずである。なぜなら、その動物が生きる世界観によって、その聖性観念が異なると考えられるからである。例えば、ユダヤ＝キリスト教を背景とした「神・人・家畜⁷⁾」のヒエラルヒーが確立された世界観と、本論で取り上げるモンゴル国の世界観によっても、その聖性の付与のされ方に違いが起こるのは当然のことである。また、その聖別された動物が、家畜であるのか、野生動物であるのか、もしくは家畜を野生動物として見なしたものであるのかなど、その動物に付与された役割によっても、その聖性の位相が異なるであろう。そうであるならば、モンゴル国の「競馬ウマ」に対する聖性観念とは、一体、どのようなものであろうか。

そこで本論では、モンゴル国における「競馬ウマ」の聖性観念の特性を理解するために、①モンゴル国の「ウマ文化」とナーダム祭の競馬を明らかにし、②「競馬ウマ」の鑑定法や調教法を検討し、③「競馬ウマ」の聖性の位相について考察することとした。

なお、本研究では以上の課題を考察する目的で、6度のフィールドワーク⁸⁾を行い、面接調査と参与観察を実施した。また本文中、重要であると考えられるモンゴル語の用語は、括弧内にキリル文字表記およびローマ字転写表記を併記した。

1 先行研究の検討

モンゴル国では現在、競馬はナーダム祭、旧正月(цагаан сар/caGan sara)の祭りなどで行われているほか、観光の集客資源として地元観光会社が、夏季の外国人旅行者のために競馬を開催することも目立ってきている。しかし、競馬に関する研究では、ナーダム祭の競馬について述べられたものが主流である。これらの研究によると、競馬を含めたナーダム祭の3種の競技(競馬・相撲・弓射)は、その起源を「オボー(об оо/obu)」と呼ばれる土地神を祀る塚の儀礼(「オボーの祭り」)に求められると説明されている。

例えば田中克彦によると、ナーダム祭の3種の競技は、特定の山や、道標となるオボーに奉納される神事としての色合いを強くもっていたが、そ

の後仏教の伝来とともに、活仏の転生の機会に盛大に行われるようになったという⁹⁾。また、蓮見治雄は、オボーを祀る場合は、「前夜祭」、「本祭り」、「後祭り」に分かれるが、ナーダム祭はその「後祭り」に相当すると位置付けている¹⁰⁾。小長谷有紀は、旧暦5月に「オボー」に酒や乳製品を捧げ、その後奉納儀礼としてナーダム祭の3種の競技が行われ、一般に雨乞いとして了解されていたという。また、かつては初秋に行い、乳製品の「収穫の祭り」に相当する「オボーの祭り」でもナーダム祭が催されていたと述べている¹¹⁾。

これらの研究によると、競馬は相撲や弓射とともに、土地神を祀る儀礼であるオボーの祭りの場において、「雨乞い」や「乳製品の収穫祭」、「供儀」などの構成要素として位置付けられてきたといえよう。

これらのモンゴル国ナーダム祭に関する競馬研究では、競馬を行う「場」としての儀礼に関心が集中し、競馬をひとつの競技として着目する視点に欠けるため、競馬競技自体の記述は非常に希薄である。それを証拠に、「オボーの祭り」において競馬が行われていたという記述は存在するが、それがどのような競馬であったかの記述は、管見ながら、みられない。

それを補足するのは、モンゴル国のウマに関する先行研究である。例えば『セツェン＝ハンの駿馬～モンゴルの馬文化¹²⁾』、『モンゴルの馬と遊牧民¹³⁾』や、『馬の文化¹⁴⁾』に連載された芒来^{マシライ}の記述が挙げられる。これらはモンゴル国のウマに関する文化を「馬文化」と名づけ、家畜一般のウマだけでなく、競馬に関する詳細な情報も与えてくれる。しかしこれら先行研究の競馬事例の捉え方は、モンゴル国の「馬文化」の一要素という域を出ず、競馬そのものが論じられたものではない。

こうした先行研究を検討すると、モンゴル国の競馬に関する研究は、まだまだ事例の蓄積が必要な段階にあるといえるであろう。また、本論が方法としてとるような、「競馬ウマ」を主体に競馬を論じたものも見当たらない。ウマの存在なしでは成立しえない競馬競技において、それに参加させるウマに着目することは、競馬の本質に迫るひとつの方法であろう。そこで本論では、モンゴル国の競馬に関する先行研究の希薄さを補足するた

めに、「競馬ウマ」を視点の中心に据え、そこからナーダム祭の競馬について言及することとする。

2 モンゴル国の「ウマ文化」と競馬

2-1 競馬の背景となる「ウマ文化」

モンゴル国において家畜というと、ウマ、ウシ、ヒツジ、ヤギ、ラクダの「五畜」を示す。1995年の調査では、モンゴル国の全家畜頭数は2860万頭とされているが、その中でウマは約9%を占めている¹⁵⁾。これら「五畜」は、全国に分布するものの、地勢、植生、市場との距離などにより、家畜の分布状況に特徴がみられる。ウマは主に、草原が大きく広がるモンゴル国東部に比較的多く分布し、ヒツジ経営を中心にし、ウマ経営を併せさせた形で遊牧されている。

現在では、野生馬（モウコノウマ・Mongolian wild horses）は確認されておらず、飼育されているのは、家畜馬の乾燥地適応型である蒙古馬（Native Mongolian horses）である。成体雄の平均体高は129.7cm、平均体長135.6cm、成体雌の平均体高127.2cm、平均体長133.9cmで、体重は360～380kgであるという¹⁶⁾。

モンゴル国のウマは、1頭の種牡馬と、多数のメス畜、子畜と去勢畜とからなる群れで牧畜され、表1のように呼び分けされている。群れは、住居から遠方の牧地で放牧され、人間が定期的にそこに赴き管理されるだけである。生殖、出産、授乳・哺乳介助に際してもウマは、他の家畜と比較すると、人間の介入が非常に少ない、または全く行われない例といえる。いわば自然にまかせて放牧されており、群れの中のウマは「再野生化¹⁷⁾」している。

当該文化でのウマは肉、乳、皮などの供給源でもあるが、最も重要なのは乗用としての役割である。モンゴル国では、去勢されたウマのみが乗用に用いられる。例外的にメスウマに乗られることはあっても、それをいわば「恥」として見る傾向にあるという。去勢ウマを乗用とするためには、「再野生化」したウマ群から、乗用に用いる去勢ウマを捕まえることから始める。一端群れから離されたウマは、居留地に繋いで調教を行ってから乗用に用いられる。必要な頭数の去勢ウマを乗用

として調教し、ある一定期間利用すると、群れにもどす。同時に、別の去勢ウマを群れから離し、乗用に調教し用いるという形態をとる。これは、特定の去勢ウマが乗用に用いられることによる疲労を軽減し、ウマの機動力を保持する理由からであるという。また、長距離を移動する場合、自分の乗ってきたウマを担保とし、他人のウマを借りて移動することが日常的に行われているという。すなわち、1頭のウマを乗用専用にするわけではなく、ウマの機動力を第一に考え、乗りかえるという形をとるのである。

そうした日常で乗るウマと「競馬ウマ」の共通性は、去勢ウマが用いられることである。それはモンゴル国で競馬を表す語が「モリ・オラルダハ（去勢ウマが競走する）」であることでも分かる。こうした去勢ウマの競走であることは、ヨーロッパ産の競馬がメスや種牡馬に出場機会を与えている¹⁸⁾ことを考えると、モンゴル国の競馬の大きな特徴であるといえる。最も、現在は去勢前の2歳馬や種牡馬のレースも行われている。しかし、去勢前のウマのレースは、「競馬ウマ」として完成される前の、調教の一環として考えられている。また、種牡馬レースはもともと行われることはなく、比較的新しいものであり、駿馬の遺伝子を期待した市場への参入を視野に入れた競走であるといわれている。このことより、モンゴル国の競馬は去勢畜を中心とした競走といえるだろう。

それは、家畜群中の去勢畜の割合が非常に高いという、モンゴルの牧畜文化の特徴と関連すると考えられる。モンゴル国では、20～30%の割合で、去勢畜が群れに維持されている。それは、他地域と比較すればその特徴は、より明らかになるであろう。例えば地中海地域の牧畜では、種オスとごく一部の去勢畜のみが群れに維持され、それ以外は、子畜の時点で大量に屠殺されるという谷の報告¹⁹⁾がある。谷によれば、1人の牧民が所有するヒツジの2群中、600頭あまりのメスに対して、種オスは10頭あまり存在し、去勢された誘導オスは各群れに1頭ずつ、すなわち2頭しかいないことが報告されている。また、トルコ系遊牧民ユルックにおいても、成メスヤギと種オスヤギのみで群れが構成され、去勢オスを全く維持しない例が、松原正毅²⁰⁾によって報告されている。

これらと比較しても、モンゴル国が非常に多くの割合で去勢畜を群れに維持していることが分かる。

こうしたモンゴル国の牧畜形態を小長谷は、「去勢畜文化」と呼び、特徴づけている。こうした特徴が表れる理由として小長谷は、オス家畜の市場となる都市が、高原内において展開されず、むしろ自給自足的な消費構造をもっているということ、また、去勢畜を群れの中に維持できる植生に恵まれている自然環境を挙げている²⁰⁾。

こうした去勢畜を多く維持するモンゴル国の「去勢畜文化」が、去勢畜を乗用とし、むしろそれ以外に乗ることを「恥」とさえ考える心情を生み出している。さらにその「去勢畜文化」を背景として、モンゴル国の競馬は成り立っていると考えられるのである。

そうした去勢ウマは、家畜の中でも特別視される存在である。モンゴル国の諺に「モンゴル人は去勢ウマのたてがみの上で生まれ、去勢ウマの背の上で死ぬ」というのがある。これは、モンゴル国の人々が、一生を通じて去勢ウマに親しんでいることを表していると同時に、そうありたいという願望をも表現しているのであろう。また、「モリティ（去勢ウマがある、去勢ウマに乗っている）」と表現すると「幸運である」という意味となり、逆に「モリグイ（去勢ウマがいない、去勢ウマに乗っていない）」といえは、「不幸」であるという意味を表す。こうした慣用句からも、去勢ウマは家畜の中でも特別視され、人間の一生のサイクルと深く結びつき、その存在は人間の幸福さえも左右することが分かる。

それが、駿馬であるとなおさらであることは想像に難くない。モンゴル国の伝統的な英雄叙事詩にも駿馬は頻繁に登場する²¹⁾。英雄アマル＝ジャルガル・ハーンの駿馬は、普通のウマがまる7ヶ月はかかるであろう道のりを、ひととびで駆け、英雄を助けた。また、英雄エンヘ＝ボロト・ハーンの愛馬は、俊敏な足の持ち主だけでなく、高貴な姿をして10ヶ国の言葉を理解するとされている。『元朝秘史²²⁾』においても、チンギス・ハーンの側近が4頭の駿馬に例えられている。これらに登場するウマは、英雄の勇敢な活躍ぶりを形容するための俊足の乗り物としてだけでなく、時にはその並外れた知恵と洞察力で英雄に助言し、危機を救う存在として描かれている。そこには、英雄の乗り物という役割を超え、「仲間、友人」としての役割が与えられているのである。こうした事例は、モンゴル国の「モリ（去勢ウマ）」に対する心情をよく表しているのである。

2-2 ナーダム祭の競馬

モンゴル国のナーダム祭は、7月から8月にかけて、各アイマク（県）や各ソム（村）単位でも行われる。しかしその中でも、7月11日・12日の革命記念日に、国家規模で行う「イフ（大きな）・ナーダム」が、最も盛大である。それは、首都ウランバートルのナーダムスタジアムをメイン会場として開催される。以下は、その「イフ・ナーダム」における競馬の事例である。

騎手は、5歳から12歳くらいまでの少年少女が務め、表2に示したように、ウマの年齢別にレースが行われる。1レースにつき通常300から

表1 モンゴル国のウマ畜 ～年齢および性別による呼び分け～

	メス <グー>	種牡馬 <アズラガ>	去勢ウマ <モリ> <アクト>
明け6歳以上	(イヒナス)	(イヒナス)	(イヒナス)
明け5歳	(ソヨーロン)	(ソヨーロン)	(ソヨーロン)
明け4歳	(バイダス)	(ヒヤザーラン)	(ヒヤザーラン)
明け3歳		(シュドレン)	(シュドレン)
明け2歳←去勢	(ダーガ)		
当歳	(オナガ)		

ウマ 総称；アドー

() 年齢による呼びわけ

< > 性別・去勢の有無による呼びわけ

400頭のウマが競走に参加するのが一般的である。まず、ゴール地点に出場ウマが集まり、ウマの歯の状態を確認し、登録を済ませる。ウマの歯の状態は、年齢を知る指針となり、ウマの年齢による呼び分けにも、歯に関する語が使われている。

競馬は、原則的に参加資格などではなく、一定の参加料さえ支払えば、誰でも参加できることになっている。あらかじめ決められた時間がくると、国旗を持ちウマに乗った役員が先頭になり、国旗のまわりを周り始める。それに速歩きほどの速度で各ウマが従うのである。その際、騎手は「ギンゴ²⁴⁾」と呼ばれるチベット仏教を背景とした経文に節を付け、声高らかに吟じる。レースの途中でも、ウマにそれを聞かせ、ウマの士気を高める。次に、ゴール地点からスタート付近まで、ひと塊の集団となって移動する。そうして、スタート地点で随時ウマを方向転換させると、もと来た道を競走するのである。スタート当初は、相当なスピードで駆けるが、徐々に一定のペースをつかみながら走る。そのとき、ウマがたてた砂埃をかぶると縁起が良いとされている。特に「競馬ウマ」において、最も力が充実しているとされるソヨロン（5歳馬）がたてた砂埃は、それをかぶると1

年の幸福が約束されるといわれている。ゴールが近づくと、手綱をゆるめ、鞭をいれる。前のウマを追い抜くときには、左側から出るようにする。ウマの左側は、日常の牧畜作業中も、乗馬や搾乳のために人がウマに近づく方向で「正しい側」と呼ばれ、重視されている。同着の場合は左側のウマに優先順位が与えられる。

ゴール地点では、乗馬した係員が順位を記した木札をもって待機し、到着したウマの手綱をとり騎手に木札をわたす。そのことを「速馬をつかむ」と表現し、出場ウマの上位6割が対象とされ、それ以外は着外となる。ゴールしたウマの汗はホソールという道具で拭ってやることで、ウマの疲労回復を手伝うことになるという。特にソヨロンの優勝馬の汗は、観客がなめたり、体につけたりする。その汗を自分にとりこむことにより、1年の幸福が約束されるといわれている。また、上位入賞5頭を「アイラグ（馬乳酒）の5頭」と呼び、アイラグをウマの頭や背にかけ、ウマを称える詩（ツオル）がウマに与えられる。同時に、それを育てた調教師（オヤチ）を称えるツオルも吟じられ、賞品が与えられる。近年では、騎手を務めた子どもにも賞品が与えられるようになった。ちなみに調査を行った1997年の賞品は1位のオヤチ

表2 ナーダム祭（於ウランバートル）競馬の年齢と競走距離

年齢別出場馬	競走距離	レースの特徴
6歳以上（イヒナス）	約30km	イヒナスとは6歳以上（成馬）の去勢ウマの総称。ただ、6・7歳のウマは、成長過程で重要な時期と考えられているため、実際、競馬に出場させることはほとんどない。一般に、8歳から再び出場させることが多い。
5歳馬（ソヨロン）	約25～28km	ソヨロンは犬歯が生えるという意味。最も力が充実していると考えられる年齢。疾走中の砂埃をかぶったりレース後の汗をなめたりすると、1年の幸福が約束されるといわれている。
4歳馬（ヒャザーラン）	約20km	ヒャザーランとは乳隅歯が永久歯に生え替わる時期という意味がある。
3歳馬（シュドレン）	約15～20km	シュドレンとは、乳門歯2本が永久歯に生え替わる時期という意味がある。
2歳馬（ダーガ）	約10～15km	ダーガには「今年の最後は来年の先頭」という諺が伝承され、最終着のウマと騎手にも賞品をわたし、表される。去勢前の幼いウマの将来性に期待する配慮といえよう。調教完成後のレースというより、レースも調教の一部であるという感覚である。騎手も、体重の軽い幼い子どもが務める。
種牡馬（アズラガ）	約25km	モンゴル国の牧畜文化においてウマは2歳で去勢されるが、そのときに種牡馬として選ばれたウマをアズラガという。このレースは、荒々しいものとなり、上記のソヨロンとならび、人々の関心が集まる競走となる。去勢ウマがたてがみを切りそろえられるのに対し、アズラガは自然のまま伸ばした状態である。

にはテレビと絨毯、2位にはテレビと小型の絨毯、3位には靴と絨毯、騎手には通学用の洋服が与えられ、ナーダム祭のメイン会場であるスタジアムにおいて表彰されている。

3 「競馬ウマ」の鑑定法と調教法

3-1 オヤチについて

牧民がすべて、持ちウマを競馬に出場させるわけではない。特にウランバートルで行われるイフ・ナーダムにおいてはその傾向にある。地方で行われる競馬は、競走距離も短いことが多く、比較的容易に出場させることもできるが、イフ・ナーダムでは、地方で勝ちぬいた経験豊富なウマが集結するのが一般的である。それらのウマは、競馬用に調教されたウマである。そうした競馬用にウマを飼育、調教する専門知識をもった牧民をオヤチと呼ぶ。オヤチは、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ラクダなど他の家畜を牧畜する傍ら、一般的に父親や叔父などの血縁から、オヤチの技術を口伝で受け継ぐ。現在では、ウランバートルにある相撲学校（学長バインムンフ、1992年設立）で、相撲（サンボ・レスリング・柔道を含む）、弓射とともに、オヤチの技術を学ぶことができるようになっている。

オヤチは、一般の牧民と比べ、多大な費用と労力が必要となる。さらに、首都ウランバートルから遠距離に居住する牧民が、首都で行われるナーダム祭に出場するときなどは、その移動に半月から1ヵ月ほどの期間を要する。その間、オヤチの所有する他の家畜は、親戚や知り合いに預託し、その牧民の家畜と混合して管理をゆだねる場合もある。それには、受託側の牧民に余分な労力を強いるだけでなく、他の家畜集団が一時的に混ざることによって家畜同士の関係が不安定になるという結果を生む。特にウマ畜は、ワン・マイル・ユニット²⁵⁾という形態で牧畜されているので、他の慣れない個体が入ることにより、激しい争いに発展することもある。その結果、ウマが大きな傷を負い、その治療だけでも余分な手間がかかり、受託者の家畜だけでなく、自らの家畜にも大きなリスクがかかることになる。筆者も、実際にナーダム祭のとき、他人に預けたために傷つけられたウマが、かまどの灰を塗られ、治療されるのを見たことがあ

る。

こうしたリスクを負ってまで、オヤチが「競馬ウマ」を育てる理由は、優勝馬は後に高値で取引され、経済的に保証される場合があるからである。また、それに加え、ナーダム祭に持ちウマを優勝させたオヤチは、ウマと同様に賛辞を受け、他の競技の力士や射手とともに国民的英雄になることも挙げられる。

こうしたオヤチの仕事の重要性は、モンゴル国の競馬が、もともと鞍や鐙を付けず、裸ウマの競走であったことから確認できる。現在では鞍や鐙を付けたウマも多数出場するが、元来、騎手の技術を競うものではなく、ウマ自体の「長距離を速く走る能力」を純粹に競うものであったとされている。ゆえに、ナーダム祭で優勝し表彰されるのも、ウマとオヤチである。最近では、騎手の子どもも表彰されるようになってはいるが、優秀な成績はウマとオヤチの貢献が大きいのである。

また、7月11・12日に本来のナーダム祭が行われた後、翌13日に「オヤチーン・ナーダム（オヤチのためのナーダム祭）」が開催される。それは、当日、相撲などの人気競技がスタジアムで行われる間、競馬に自らのウマを出場させていたり、最後の調整をしているため、オヤチはそれを観戦することができない理由から、改めて開催されるのである。そのナーダムでは、ウランバートル郊外の草地で、オヤチのために、ナーダム祭出場の力士達が、相撲を披露するのである。1997年のオヤチーン・ナーダムでは、国のナーダム祭でベスト8に残った力士達（シューブルフと呼ぶ）を含めた64名が参加し、また短距離（2400m）の競馬も行ったという²⁶⁾。

草原で観客が車座になったなかでの相撲は、スタジアムで行われる相撲に比べ、非常に親しみやすく、オヤチはウマとともに（または、馬上から）観戦し楽しむ。ただ、規模は縮小されるとはいえ、オヤチーン・ナーダムは、「お遊び」程度の催しではない。ナーダム祭が終わってからとはいえ、シューブルフ（ベスト8）の力士達が一堂に会するというのは、モンゴル国内における力士の地位の高さを考えると、オヤチーン・ナーダムの権威を物語る。こうしてナーダム祭本番の相撲を楽しむことができないオヤチのために、改めてこうし

た大会を開く心情からも、オヤチが特別な扱いを受けていることが伺えるのである。すなわち駿馬の能力を見ぬき、見出し育て上げたオヤチに絶大なる賞賛が寄せられるということである。

3-2 駿馬の鑑定法

賞賛的となるオヤチのわざとは、具体的にはどのようなものであるのか。まずは、駿馬の鑑定法を事例としてあげたい。以下で述べる事例は、ウランバートル郊外在住のN氏の面接調査によるものである。彼は、調査時のナーダム祭に4頭のウマを出場させたオヤチである。N氏は、ドルノゴビ・アイマク出身で現在ウランバートル市の郊外に在住している。調査当時（1997年7月14日）72歳の男性であり、オヤチの仕事を23年間しているという。以前は、国营農場のジャルガルン牧場の牧場長で、一般にブジェワイスキー馬と呼ばれる野生馬の「ホラン（хулан/qulan）」と「タビ（тахь/taki）」という種を交配する業務に携わっていた。牧場勤務時代は家畜を所有しておらず、いわゆる牧民ではなかったものの、ウマについての知識はもっているという。オヤチの仕事は50歳から始めたが、こうした高齢から始めることはこの世界では、非常にまれであるという。実の父親も、オヤチであったが、毎年ナーダム祭に出場させていたわけではなく、ときどきアイマク（県）やソム（村）主催のナーダム祭に出場させていた程度だった。しかし、その割には良い成績をあげていたと記憶している。オヤチの知識を、すべて親から受け継いだわけではなく（本来はそうあるのが一般的であるが）、特に親しい5人の友人のオヤチが餌の与え方、調教法を教えてくれたという。

一般的にオヤチの知識は、親や親戚を師匠とし、幼い頃より実践をとおして伝承されるものである。その技術は、本来秘儀とされ、公にすることを極端に嫌う傾向にある。なぜなら、前述したように優秀な「競馬ウマ」を育成することは、オヤチとして社会的ステータスを得ることとなり、同時に、経済的にも保証されるという社会背景があるためである。さらに、オヤチの技術は、師匠の仕事を見て、自然と体得するものであり、近代教育システムのなかでみられるように、その技術を

言語化して伝達する方法をとらないのである。

しかし、N氏は、経歴からも明らかのように、1人の師匠から実践をとおして、すべての技術を学んだのではない。従来の伝統的なオヤチのトレーニングを受けて1人前となった、5人の友人から知識を得ている。つまり、本来、師匠と弟子の間でのみ共有される知識が、N氏の場合、複数のオヤチの知識を学ぶこととなった。さらに、50歳からオヤチとなったことから、学んだ技術の多くは、実践と言語を交えての習得となり、そのため、他の多くのオヤチには語ることでできない、オヤチの技術の一般化が可能となったと考えられる。よって、N氏は、本来、言語化することが困難であるオヤチの技術を言語化して説明できるという、オヤチの技術を明らかにするうえで、欠かすことでできない人物であるといえよう。

よって以上の理由によりN氏が語るオヤチのわざを事例として取り上げることとする。また、各事例において、オヤチの一人であるA氏やマンライ・オヤチ（1番のオヤチ）という称号を持つD氏における面接調査の結果も、N氏の事例とともに記述し、より一般的なオヤチの技術の枠組みを提出できるように努めた。また、同様の理由から調教法などを伝える文献やシンポジウムの発表なども記載した。

N氏の場合は、「競馬ウマ」を購入することから始める。ナーダム祭に出場させるウマは、良馬の産地とされているヘンティー・アイマク²⁷⁾、ガルシャル・ソムから購入した。特に当地で生まれた種を、産地の名を取りガルシャル・ウダム（yдам/udum血統）と呼び、駿馬の血統といわれている。

購入の際にはどの牧民が駿馬を持っているかの情報をあらかじめ収集し、その血統を調査する。そして現地で実際にウマを見て、購入の意志を持ち主に伝え、価格の折り合いがつけば購入する。購入先の牧戸は、ウマの売買を専門とするのではなく、あくまで一般の牧民である。今回の競馬に出場させた馬の金額は当時で1頭15万tg²⁸⁾であった。1度に5頭のウマを購入したが、同じ牧戸から購入しないことが大切であるという。それらの次世代が「血が濃く」なることを避けるためだという。オヤチのA氏もD氏も、それを「血が近

づく」と表現し、それを避けることが、良いウマを育てる条件であると述べている。これは、ウマにもインセスト・タブーに近い考え方が存在していることを表しており、人間と同様に、親族体系が意識されていることを示している。

また、良いウマの条件としてD氏は、30 kmの距離を40分で走ることができることを挙げている。以前は、1日300 km走ることができるのが、良いウマの条件だといわれてきたが、近年それが短くなってきており、以前のような良いウマを復活させるのもオヤチの役割だとしている。それは、社会主義体制下ですべてが労働組合のウマとなり、個人が「自分のウマ」という意識で目をかけなくなったからだとしてD氏は理由づけている。

また、N氏は購入の際に、以下のような点で駿馬を鑑定したという。こうした特徴は「ウマの宝(モリン・エルデネ)」と呼ばれ、友人達や父親から口頭伝承されたという。N氏によると、①眼の上のくぼみ(オハルハイ)が深いこと②鼻が野生鹿(ハンダガイ)のような形をして、鼻全体、そして穴も大きいこと③目が大きいこと④眉が太いこと⑤唇が厚いこと⑥耳が大きいこと⑦アマン・フズー(頭部と胴体を繋ぐ最初の頸骨)の幅が広いこと⑧骨盤が広く、高いこと⑨肋骨が太くて丸くて大きいこと⑩尾の骨が長く、尾自体が太いこと⑪臀部が高い(上に突き出している)こと⑫背筋が弓のような形をしていること⑬足がまっすぐで後ろ足の間が広いこと⑭足が太くてがっしりしていること⑮アキレス腱と骨が離れていること⑯肛門が奥深いことなどであるという。

また、内モンゴル中部のウジュムチン草原の調査を行った楊海英²⁹⁾は、外観の特徴だけでなく、ウマの行動を観察することによって、内臓などの良し悪しを判断し、駿馬を見分ける方法を紹介している。すぐに寝て、目覚めが良く、眼光が鋭いウマは、心臓が大きいという。呼吸が安定し、普段は風が吹いてくる方向に斜めに立って草を食べることの多いウマは、肺のしわが多いので良いとされる。また節度のある食事をとり、糞塊が硬いウマは大腸が分厚いという。排尿回数が少ないうえ、前肢まで尿を飛ばすほど力強く小便をするウマは、生殖器が太く、肝臓が健全であるという。また、乗り終わって鞍をとると、自分で寝転がっ

たり、地面に背中をこすったりするウマは、自らの疲労調整ができる賢いウマとされているという。

このような口伝で伝承されるものは、気候や植生など、地域の特性も加味され、また、オヤチごとの秘伝も含まれることから、共通項はあるものの非常に幅広いレパートリーをもっている。一方、“Мориньн Шинжийн Судар” (「ウマの鑑定の経典」)³⁰⁾と総称される書物類には、一般的なオヤチの知識が記述されている。それによると、駿馬の見分け方が、非常に体系的に示されている。例えば“Монголын Хурдан Моринь Тухай” (「モンゴルの駿馬について」)³¹⁾によれば、13の大きいもの、9つの長いもの、6つの太いもの、6つの細いもの、9つの広いもの、5つの短いもの、3つの高いものが、ウマの身体の特徴に必要なであると述べられている。具体的には、①13の大きいもの；額、下あご、眉、すべての骨格、顔、腹、乳房の肉、筋肉、胸、4つのひずめ②9の長いもの；4つの脛、背中、鼻、あご、舌、耳③6つの太いもの；2つの耳の根元、頭の型、足の付け根、尾の付け根、陰のう④6つの細いもの；首が細い楕円形であること、鼻が細く平らであること、2つの耳の軟骨が細いこと、2つの耳の先端が尖っていること⑤9つの広いもの；4つのひずめ、鼻の穴、2つの耳のくぼみ、胸から股にかけてのわかれめ⑥5つの短いもの；尾、肩、くるぶし、額の毛⑦3つの高いもの；額(頭骨の天辺)、肩骨間の隆起、臀部と記述されている。

また、1995年に開催された「シルクロード・奈良国際シンポジウム³²⁾」におけるプリンバトの発表によると、身体的特徴による鑑定のほかに、「五臓の鑑定」や「声による鑑定」も伝承されているという。プリンバトは五臓の鑑定として、以下のように5例を挙げている。①目が赤ければ心臓が大きく、他のウマを恐れることはない。目が赤くなければ、心臓が小さく引込み思案である。②鼻の頭の両脇が丸く大きければ、肺が小さいので良い。逆に鼻が小さければ肺が大きいので長距離を走らせることには向かない。③耳が薄く硬ければ、腎臓が小さいので良い。耳が分厚いのであれば、腎臓が大きいので、長距離には向かない。

④舌が薄くて白色であれば肝臓が小さいので良い。舌が厚くて赤色であれば肝臓が大きく、それが振動して心臓を圧迫するので走ることができない。⑤歯茎が引き締まっていれば、脾臓が小さいので良い。歯茎がむくめば脾臓が大きいので良くないという。これらは、前述のウマの身体的特徴で良し悪しを鑑定する方法と重なるが、五臓の鑑定は、身体の特徴から直接、内臓の大小を見分け、それによって競走に向くウマであるのかを鑑定する方法であるのだろう。「声の鑑定」では、ウマの声で最も良いとされるものは、ひばりの鳴くような声であり、次がはげたかの声、最も良くないとされているものは、豚のような低い声であるとされている。

こうした駿馬を見分ける方法は、ウマの特質に応じた形で家畜を利用してきた、牧畜民としての経験知の集積である。他にも、ガンガン・モリ（おしゃれなウマ・祝い事があるときに乗る）、サイン・モリ（良い馬・乗りやすい馬）、ジョロー・モリ（側対歩のウマ・長距離には向かないが乗り心地良く、格好良いウマ）、オールガチ・モリ（放牧中の馬群から、ウマを捕まえるときに乗るウマ、性格が従順）など、場面や用途に応じてウマを乗り分けるために、すべての去勢ウマに対して鑑定は行われている。それは、ウマの特質に応じた利用を目的とし、ウマの完全利用を可能にする牧畜技術の一端である。それらを背景として、「競馬ウマ」を鑑定する特別な技術を、オヤチが担っているといつてよいであろう。

3-3 「競馬ウマ」の調教法

オヤチに天性を見抜かれたウマの能力は、専門的な技術によって磨かれることとなる。「競馬ウマ」として選別されたウマは、競馬の直前になるまで、他の家畜と同じ群れの中で飼育される。ただ基本的に一般の乗用には用いられず、時々人を乗せる場合もあるという程度である。前述のN氏の場合、秋になると（川の水が凍ることを目安にしている）、「競馬ウマ」を群れから離し、一旦居留地に繋留し、体の様子を観察する。脂肪の付き方と筋力の均整が取れていれば、再び群れに戻し、自由に放牧する。しかし脂肪が付きすぎているウマは、しばらく繋留し食餌制限を行い、多少のか

らだの絞込みをする。ナーダム祭レース前のウマの状態と比較すると、秋は太らせることが大切であるが、脂肪の付きすぎは警戒すべきであるという。そうして体の均整が整えられてから「競馬ウマ」は、再び群れに戻されるのである。

こうして「競馬ウマ」が1年の大半を、群れの中で他のウマとともに過ごすことは、「ウマにとっての自然」であると了解されている。すなわち、「競馬ウマ」の力を保持するために、群れでの飼育は不可欠であり、より健康になると考えられている。そうして、夏季になりレース前の調教に入ると、「競馬ウマ」を群れから捕獲するのである。

前述のN氏の場合、アズラガ（種牡馬）とイヒナス（6歳以上）ならレースの22日前に捕獲する。それより若いウマは、18～19日前に捕獲するという。「再野生化」し、放牧されているウマ群は、種牡馬でなくとも去勢ウマでさえ、非常に荒々しく、全く人を寄せつけない。それを乗用にしようとする、オールガと呼ばれるウマ捕り竿をもった人物が、去勢ウマを確保することからはじめる。そのウマを確保するという行為は、非常に困難で、その技術にすぐれた人物を「オールガチ（オールガの人）」と敬意をこめて呼ぶほどである。ウマ捕り名人である「オールガチ」は、親戚近所などに、その仕事を頼まれ、引き受けることも多い。それほど、特別な技量を要する大変な仕事である。そのウマに、轡をはめるとなれば、一種の格闘となる。屈強な男性がまず、頭部の耳の部分をつかみ、その後、足を捕まえ、ウマに引きずられながらも地面に押さえつける。これをモンゴル語では、「ホルドジ・トンゴロホ」と呼ぶが、この行為はモンゴル相撲の技にも用いられている動詞である。すなわち、非常に力を必要とする大仕事なのである。こうして、「再野生化」した去勢ウマに対し、轡をはめ、居住地のウマ繋ぎ場に繋ぐ。これで、放牧されている去勢ウマから、「競馬ウマ」となり、ようやく人間のコントロールが、かろうじて及ぶ存在となるのである。

オールガで捕らえられた「競馬ウマ」は、居留地の前に繋留し、食餌制限をする。口に覆いをかけ、自由に草を食べさせないようにし、これまで放牧により疲れた筋肉を十分に休ませる。腹部が太ったウマには、口に覆いをかけるのに加え、胴

に毛布を巻きつけ、汗をかかせ、体を絞り込む。

しかしこれにも例外はあり、N氏の所有するソヨロン（5歳馬）の場合、「気が軽い（小さい）」ので、近くで物音をするとしちに気が向いて、集中力を欠いてしまう。また、太陽の日差しにも弱く、涼しい場所を好むので、居留地の前の柱に繋ぐのは得策ではない。ゆえに、本来なら居留地に繋いで管理すべきところを、ナーダム祭前でもできるだけ他のウマとともに放牧し、自由に草を食べさせる方法をとっているという。

夜間には、約6時間ほど、口の覆いを外し、植生の貧しい牧地で食餌をとらせる。そのときに、腹部が絞り込めていないウマは、夜間も口の覆いを外さない。そうした管理をするために、夜間はオヤチが「競馬ウマ」の傍らで眠り、付ききりで世話をすることとなる。

10日くらい前になると、騎手を務める子どもが、ウマに近づく。騎手は、オヤチの実子や親戚筋の子どもが務めることが一般的である。その騎手の子どもは、まず、チベット仏教を背景とした経文「ギンゴー」を聞かせながら、ウマを繋いだまま、柱の周辺をゆっくりと歩かせる。その折にかいた汗は、1年中の「悪いもの」が一緒に流れ出すと考えられているので、ホソール（x y c y y p/qusuGur）という道具でよく汗をこそげ落とすことが重要であると考えられている。ウマは、ギンゴーを聞くとナーダム祭が近づいたことを悟るといわれている。

それから徐々に2から4 kmほどを1日に1度走らせるようにする。肥満気味のウマなら、午後1時から2時ごろの1番暑い時間帯に、痩せたウマなら朝の涼しい時間に走らせる。そしてナーダム祭までにしだいに距離を伸ばし、調整する。

オヤチは、数頭の側対歩のウマを乗り継ぎながら、手で「競馬ウマ」を引いて、ナーダム会場までゆっくりと移動する。「競馬ウマ」を疲れさせないように調整しながら移動するためである。その折、側対歩のウマに乗る理由は、乗り心地が良く、長時間乗っていても疲れないからである。また、側対歩のウマに乗ることはおしゃれでスマートなことで、いわば「よそ行き」の乗り物であり、彼らにとってダンディズムの象徴なのである。

ウランバートルから距離があるオヤチは、半月

から1ヵ月前に移動を始めるものもいる。競馬会場近くの宿営地に仮設テントを張り、ウマを調教しながら、ナーダム祭終了まで過ごすことになる。この宿営地には、各地からオヤチがテントを張っており、オヤチと「競馬ウマ」で形成された集落のようである。そこでは、ストーブを持ちこみ、自炊をしながらの長期戦であり、遊牧民の暮らしぶりそのものの光景である。ちなみに、1997年のナーダム祭においてN氏のソヨロンは、約400頭中23位、ヒヤザーランは約380頭中40位、ダーガは約400頭中50位、シュドレンは約300頭中47位の好成績であった。

このように「競馬ウマ」の調教は、ウマの性格や体質に応じて、オヤチが付ききりで世話をすることが分かる。モンゴル国の一般的なウマ畜がほとんど人の介入がないことと比較すると、「競馬ウマ」は非常に積極的に人が関わっている例とみてよいであろう。

4 「競馬ウマ」の聖性の位相

4-1 「繋ぐ」ことの持つ象徴的意味

「競馬ウマ」を調教するオヤチは、モンゴル語で「繋ぐ人」を意味する。具体的には、ウマを群れから一時的に離し、住居の前の馬繋ぎ場に繋ぎ、調教する行為を示している。

ウマを居留地に繋ぐというこうした行為は、オヤチだけでなく、あらゆる牧民が、一般に乗用するウマの訓練についても行うものである。しかし、それにも関わらず、モンゴル語で「ウマを繋ぐ＝モリ・オヤハ（морь уях/mori uyaq）」という言葉は、単にウマを繋ぐという直接的な行為を意味するだけでなく、「『競馬ウマ』を調教する」という限定された意味をも表す。ゆえに、「繋ぐ人（уяачин/uяaGčin）」が、「競馬ウマ」を調教する専門の牧民を指す語となるのである。「ウマを繋留する」という一般の行為が、「競馬ウマ」の調教という特殊な意味に限定されるということは、「繋ぐ」ことが「競馬ウマ」の調教において重要かつ象徴的行為であるということを示すと思われる。

「競馬ウマ」の調教は、「繋ぐ」ことで始まるといえるだろう。すなわち、自然界の生き物であった「再野生化」したウマを、人間の住む空間に移

行させる行為が、調教の最低限の条件だからである。こうして、空間を移行することにより、ウマは自然界から人間界に半ば属することになり、それを経てウマは、オヤチと個体レベルで身体接触を可能にするのである。人を寄せつけさせなかった馬が、轡をはめ、繋がれるという第一段階を経て、人を乗せることを受け入れ、尾の毛や頭の毛を結ぶことを許すまでに到る。また、ホソールという道具で、汗を拭うことや、ブラシ(с о й з /soyija)をかけるなどの親密な身体接触を受け入れることとなる。すなわち、繋ぐことを契機に、オヤチとの関係を形成し、それによって能力を引き出され、去勢ウマは「競馬ウマ」となり、ナードム祭の主役の一員となるのである。

また、繋ぐことは、空間の移行を示すだけではなく、その時期をも限定する意味を持つ。「競馬ウマ」は、1年のサイクルにおいて、その大半を自然界で放牧されている。しかし、繋がれている期間のみ、「競馬ウマ」としての役割を果たすことになる。

すなわち、「再野生化」したウマは、「繋ぐ」行為を契機として、空間的にも時間的にも、オヤチと暮らしをともにする。「繋ぐ」という行為は、ウマ畜が「競馬ウマ」になる、空間と期間を限定する条件を象徴しているのである。

こうした「繋ぐ」ことに象徴される「競馬ウマ」の調教法は、モンゴルの人々が、ナードム祭を中心とした1年のサイクルを意識したうえで、自然界と人間界の存在を認めることで成り立っているといえるのである。すなわち自然界と人間界を、必要に応じて、ウマを行き来させることによって、「競馬ウマ」は育成される。ウマを恒常的に人間の支配下に置くことのないこうしたやり方には、人間と自然の共存をはかるための思想が反映されていると考えられる。こうした思想が、「競馬ウマ」育成の文化的背景なのである。

4-2 神聖視される「競馬ウマ」

ウマ本来の住む自然界を認め、人間界との共存をはかるという世界観は、競馬競技の様式にも反映されている。すなわち、ウマを主体に据えた競走であり、人間はその手助けをするという考え方が基盤にあると思われる。モンゴル国の競馬は、

前述したが、もともと鐙や鞍を付けずに走る競馬であった。その理由として、「モンゴルの競馬は、道具に頼らず、ウマの能力を純粋に競うものであるから」という了解がなされている。また、騎手は子どもが務める。それには、体重の軽い子どもが騎手になることで、ウマへの負担を減らすという意味に加え、騎手としての能力をそれほど期待できない状態での競馬の形態がみてとれるのである。

また、新聞「オノードル」(1996年6月29日)にも、ウマ主体の競馬を強調する記事が見うけられる。それによると、近年、競馬への参加者が復活する傾向にあるとしているが、一方で問題も起きているという。例えば、オヤチが賞金獲得の目的で、自分の家畜を放棄して各地の競馬に出場を重ねることが多くなってきているという。また、成績順位を上げるため、車に乗り、レース中のライバルのウマを脅したり、コースから外したりすることもあるという。またレースの途中で、最初のウマと同様の毛並みのウマに乗り替えるという不正もあったという。こうしたことの1番の問題は、本来の競馬はウマの競走であるはずなのに、人間同士が争ってしまっている点である、と「オノードル」は警告している。人の私利私欲のために競馬を行うのではなく、ウマの能力を競う、ウマ主体の競走であるという姿勢がここでも基盤となっている。

こうしたウマ本来の能力を競う競馬によって、ウマは神聖視されるに到る。そうした敬意の表れとして、「競馬ウマ」を世話する際には、必ずハダック(х а д а г /qadaG)と呼ばれる布を用いる。これで「競馬ウマ」の目を拭いたり、体を拭いたりするのである。この布は、オヤチの腰にホソールとブラシとともに常に下げられている。ハダックとは、儀礼用に用いる絹布で、主にモンゴルで尊ばれる青もしくは白色をしており、仏を包んだり仏壇に飾る布である。また、新年の挨拶にもかかせないもので、その布の上に贈答品を置き、やりとりしたりもする。そのハダックを、レースで好成績をあげた「競馬ウマ」に飾ったりもする。まさしく、「競馬ウマ」が信仰の対象であることを表す事例と考えられる。

また、最も「競馬ウマ」として力が充実してい

ると考えられている5歳馬（ソヨーロン）には、走った後の砂埃を被ると1年の幸福が約束されるという伝承がある。さらにレース後の汗をなめたり体に塗ると縁起が良いとされ、ナーダム祭競馬で1位となったソヨーロンがゴールすると、その汗を求めて、人が取り囲むこととなる。

さらに、騎手の子どもが調教中やレース途中でウマに聞かせる「ギンゴー」というお経は、チベット仏教の信仰対象である「天の馬（ヒーモリ）」、いわば馬頭観音に聞かせるものであるとされている³³⁾。これを「競馬ウマ」に唱えるということは、「競馬ウマ」はヒーモリ（馬頭観音）として認識されているということであり、聖的存在として考えられているといえる。

また、「競馬ウマ」が亡くなると、その頭蓋骨をオボーと呼ばれる土地神を祀る塚に葬られる。他の家畜が「屠殺」を前提とした生きた財産³⁴⁾と認識されていることを考えると、屠殺ではなく自然死をもって生涯を終えさせ、それを信仰の対象であるオボーに供するというのは、注目すべきである。

以上のことからモンゴル国の「競馬ウマ」は、人の支配下におき調教するのではなく、オヤチによってウマ本来の能力が高められる形で完結していることが分かる。そうした「競馬ウマ」と人の関係性がウマ主体の競走であることを支えている。そうしたウマ主体の競馬によって、能力がすべて発揮されると、「競馬ウマ」の聖性が高まり、信仰の対象となるのである。

4-3 もうひとつの聖別個体との比較

競馬によって高められた「競馬ウマ」の聖性は、モンゴルの家畜文化のなかでは、どのように位置付けられるのであろうか。モンゴルの家畜の中で、他の聖別個体と比較を行いたい。

モンゴル国では、一部の家畜に対し、人の介入と利用を禁じ、そのままの状態が存在させることによって聖別する信仰があることを、小長谷が報告している³⁵⁾。小長谷は、ウマ畜だけに限らず、すべての家畜に関して、オンゴンやセテルテイと呼ばれる聖別された家畜の事例を挙げている。これらは一般的に去勢していない種オス畜から選別され、毛もかられることなく、人が全く介入せず自然のまままで飼育されている。家畜とは、肉や乳

を人間に供給するために、生殖や、子畜に対しての授乳などを人が管理する動物である。このような前提に立てば、これらオンゴンやセテルテイは、「利用を禁じてそのまま残す」ことにより、いわば「野生動物」にみたと、聖別した個体であることを表している。それら聖別した家畜を手付かずでそのまま残すことにより、その代償としてそれ以外の一般家畜の利用を大いに促進して、家畜の大部分を消費する許可を得る概念であると小長谷は述べている。

これらオンゴンやセテルテイと呼ばれる聖別された個体と、前述した「競馬ウマ」の存在とはどのような違いがあるのであろうか。それは両者の容姿においても明らかである。表3に示したように、オンゴンやセテルテイと呼ばれる聖別された家畜と「競馬ウマ」の外見は、ある種対極にあると考えて良いであろう。ウマ畜の中のオンゴンやセテルテイは、毛が伸び放題で、乗用に用いられないばかりか人をも寄せつけず、荒々しく野生化している。それは一旦、聖別されると亡くなるまで種を代表し、その他の家畜の利用を促進させるという役割を担う。

一方、「競馬ウマ」は、タテガミを去勢畜の証として切りそろえられているうえに、尾の毛や両耳の間の毛を、紐で結ばれている。このような、紐で結ぶ行為は、ウマの力を高めるという効果があるとされ、モンゴル国での乳児が1人で歩けるようになるまで、布に包まれた上から紐で縛られていることに共通するといわれている。こうした人間の子どもと共通の信仰により、「競馬ウマ」の聖性がより高められることになる。また、長距離を速く走ることができるよう、オヤチによって調教され、経文を聞かせることによって、その聖性はさらに高められる。

オンゴンやセテルテイが手付かずであることにより聖別されていることに対して、「競馬ウマ」の聖性は、オヤチの伝統的なわざをほどこすことによって、神聖化された個体である。またその聖性は、恒常的に保たれるものではなく、ナーダム祭が終われば、もとの自然に戻される。それは、ナーダム祭を中心とした1年のサイクルに組み込まれた、神聖化された動物であることを表しているのである。

表3 オンゴン／セテルテイと「競馬ウマ」の比較

オンゴン／セテルテイ	「競馬ウマ」
種牡馬	去勢ウマ
毛は手入れせず 伸び放題	タテガミは切りそろえる（去勢ウマの特徴） 尾の毛や両耳の間の毛を結ぶ（「競馬ウマ」の特徴）
人を近づけない	居留地に繋留し、食餌制限をする。 汗を拭い、ブラシをかける。 調教する。

まとめ

以上の考察から明らかなように、モンゴル国の「競馬ウマ」の聖性は、当該文化が重層的に重なり、合成されて生み出された観念であると考えられる。少なくともモンゴルの遊牧民文化において、ウマは、他の家畜と比べ、単なる動物ではなく、人間と近い認識にある。ウマは、恒常的に人間の支配下に置かれることなく、自由に放牧されており、また、親族関係が強く意識されているという。こうしたウマと人間の関係の築き方に、モンゴル国固有の聖性付与の発端がみてとれよう。

こうしたウマ文化を背景に、オヤチが、1頭1頭のウマの系譜と性格に応じて、最も効果的な調教をほどこす。「ギンゴー」という経文を聞かせ、「ハダッグ」という儀礼用の布で世話することをおして、ウマは「競馬ウマ」として仕上げられていく。こうして、調教が成功し、「競馬ウマ」としての能力がすべて引き出されたときに、そのウマは、聖性を付与されたことになるのである。

このようにみえてくると、オヤチは単なる調教師ではなく、ウマを神聖化させるための役割をも担った、いわばシャーマン的な存在ともいえよう。このようなオヤチのシャーマン的性格は、オヤチの技術の伝承方法においても、見てとることができる。このオヤチの技術は、一般的に門外不出であり、親族間においてのみ伝承される特殊なものであると同時に、長い時間をかけて習得する「わざ」であるからである。

こうして、オヤチのわざにより神格化された「競馬ウマ」は、ナーダム祭でそのハレの姿を披露する。しかし、その聖性は永久に持続させられるのではなく、ナーダム祭が終わると、再び、一般の家畜同様に放牧される。それは、モンゴル国の遊牧民の間に伝承されてきた世界観と、そこか

ら形成されてきた伝統的な生活に基いた、「競馬ウマ」の神聖化のサイクルが存在していることを示している。それは、まさしく、モンゴルの暦に位置づくナーダム祭のサイクルに規定されているのである。

したがって、「競馬ウマ」の聖性は、ナーダム祭のための、聖性の付加であると考えてよいだろう。ナーダム祭がもともと「オボー祭り」の一部であったという事実と、アルタイ系の競馬が供犠の一要素であるという説などを考慮すると、現在の「競馬ウマ」は、生きたまま祭りに捧げられる「供犠獣」としての意味が付与されているとも考えられる。それは、亡くなった「競馬ウマ」が「オボー」に祀られることから、明らかなことであろう。

市場経済導入後のモンゴル国の現在において、ナーダム祭が国家のスポーツの祭典として位置付くようになって、も、「競馬ウマ」の聖性は保持されている。それは「競馬ウマ」が、「オボー」に生きたまま捧げられる存在であることを前提に、モンゴルのウマ文化を背景としたオヤチの「わざ」（鑑定法と調教法）をとおして、聖性が付与されているからである。人々は、その神秘的な「競馬ウマ」の聖性に畏敬の念を抱きながら、毎年、めぐりくるナーダム祭を楽しみ、「オボー」に祈りを捧げるのである。このように、ナーダム祭の競馬が、かりに外見的な近代化を進展させたとしても、その本質的な基層の部分は、「競馬ウマ」の聖性を支える文化に堅持されているといえるだろう。

註および参考文献

- 1) モンゴルではいわゆる「競馬」を、「モリ・オラルダハ」、すなわち「モリ（去勢ウマ）が競走する」と呼んでおり、日本語の「競馬」のようにウマの競走そのものを、一語で示す語が存在しない。よって、「競馬」という競技そのものを指す語がモンゴル語に存在するという誤解をさけるため、本来なら「去勢ウマの競走」と直訳するべきかも知れない。しかし、先行研究において、「競馬」と呼ばれていないような伝統的なウマの競走でも、「競馬」と記述されていることがある。これに従い、本論でも日本語の「競馬」という語を、「モリ・オラルダハ」の訳語にあてることにした。
- 2) 「ナーダム」とは、モンゴル語の遊ぶという意味の「ナーダハ」から派生した語で、「遊び」を意味する。
- 3) 拙著 1998 「儀礼における『歴史の始点』——モンゴル国ナーダム祭の変容と現在」『榎山女学園大学研究論集』第29号「社会科学篇」pp.227-234。
- 4) 大林太良 1995 「神馬の奉獻について」『馬の文化叢書6民俗』（岩井宏實編）馬事文化財団。
- 5) ウノ・ハルヴァ 1971 『シャマニズム』三省堂。
- 6) 「競馬ウマ」という用語であるが、モンゴル国では、競馬に参加するウマを単に「モリ（去勢ウマ）」、もしくは「ホルダン・モリ（駿馬 хурдан морь/qurdun mori）」と呼んでいる。すなわち、「競馬に出場する」ということが直接、ウマの呼び分けの条件とはならず、一般にいう「競走馬」や本論で用いている「競馬ウマ」というような呼び分けは行っていない。本論において「競馬ウマ」と呼ぶことによって、特別な呼び分けがなされているかのような誤解を生むことも考えられるが、本論ではあくまでナーダム祭の競馬に出場するウマについての研究であり、それを他と区別する必要があった。よって、本論の研究対象である競馬に出場するウマを特化する必要性と、競走するためだけに飼育されているサラブレッドを意味する「競走馬」との混同をさけるため、本論では「競馬ウマ」という語を用いた。
また、漢字の重複を避けるため「競馬“ウマ”」というカタカナ表記を用いた。本論では以下、それに倣い、家畜（ウマ・ヒツジ・ウシ・ヤギ・ラクダ）は、「駿馬」「2歳馬」などの熟語を除き、すべてカタカナ表記を採用した。これは、畜産研究の分野（『畜産研究会報』、『畜産の研究』などを参照のこと）などで家畜をカタカナ表記するほか、文化人類学の分野でも、小長谷有紀や一瀬恵（1999「モンゴルの人と家畜の出産をめぐる認識体系の言語人類学的研究」『地球環境研究』45地球環境財団 pp.29-38などを参照のこと）等の一連の研究にも、家畜のカタカナ表記は採用されている。本論もそれらの先行研究に準じた。
- 7) 谷泰『神・人・家畜——家畜文化と聖書世界』（1997 平凡社）を参照されたい。
- 8) 6度のフィールドワークは以下の通りである。
 - (1) 1995年7月—8月 於モンゴル国ウランバートルおよびスフバートル・アイマク、ウブル・ハンガイ・アイマクのホジルト周辺、イフ・ナーダム、スフバートル・アイマクのナーダム祭調査
S氏（一般の牧民）他面接調査（牧民、家畜のウマについて）
 - (2) 1996年2月 於ウランバートルおよびトブ・アイマクのバルンハラ周辺
ツァーガン・サル（旧正月）の祭（競馬・相撲）、バルンハルのツァーガン・サルの祭
 - (3) 1996年6月—7月 於ウランバートルおよびトブ・アイマクのエルテン・ソム、同じくナラハ
イフ・ナーダム、エルテン・ソム・ナーダム、ナラハ・ナーダム調査
S氏（農業大学教員、「競馬ウマ」について）、A氏（オヤチ）および騎手、M氏（ナーダム祭組織委員会の競馬担当者、ナーダム祭競馬の組織について）、面接調査
 - (4) 1997年2月 於ウランバートル
ツァーガン・サル（競馬・相撲）調査
D氏（「マンライ（第1の）オヤチ」の称号を持つ実力No.1のオヤチ）、B氏（相撲学校学長）面接調査
 - (5) 1997年7月 於ウランバートルおよびトブ・アイマク
イフ・ナーダム、トブ・アイマク・ナーダム祭調査
N氏（オヤチ）面接調査
 - (6) 1998年7月 於ウランバートル
イフ・ナーダム調査

なお、ナーダム組織委員会は総勢約200名からなる。その中で競馬の部門は、29名である。会長は、農業省大臣、副会長は、国防省次官とウマのスポーツ・オヤチ同盟会長、秘書は農業省課長が担当する。委員は25名で結成され、医師、獣医、通信関係、道路整備関係、交通警察、警察、法律家、役所、都市計画所、エネルギー省、農業研究学院のウマの専門家、報道関係などの職業から組織されている。
- 9) 田中克彦 1978 「モンゴルのスポーツ」『モンゴルのスポーツ』（モンゴル人民共和国書籍輸出入局編）ベースポール・マガジン社 pp.190-191。

- 10) 蓮見治雄・杉山晃造 1993 『図説・モンゴルの遊牧民』 新人物往来社。
- 11) 小長谷有紀 1996 「モンゴルのナードム祭り」『Arctic Circle』19 北海道立北方民族博物館。
- 12) サロールボヤン・J 2000 『セツェン＝ハンの駿馬～モンゴルの馬文化』 礼文出版。
- 13) 野沢延行 1992 『モンゴルの馬と遊牧民』 原書房 第3刷。
- 14) 芒来 1997-1999 「日本在来馬のルーツ：モンゴル馬?!」(1)-(15) 『馬の文化』 日本中央競馬会競走馬総合研究所 34(2)-36(6)。
- 15) 山崎正史 1997 「モンゴル国ゴビ遊牧地域における自然、人そして家畜」『熱帯畜産研究会報』4 (1) pp.22-38。
- 16) 居在家義昭・山内和津 1996 「モンゴルの家畜管理」『熱帯畜産研究会報』3 (1) pp.1-6。
- 17) 谷泰 1997 『神・人・家畜—牧畜文化と聖書世界』 平凡社 第2刷 P.33。
- 18) 例えば、イギリスでは「1000ギニー」と「オークス」は4歳メスのみの競走であり、「2000ギニー」、「ダービー」、「セントレジャー」は4歳オスメスの競走である。また、日本では、「桜花賞」、「優駿牝馬」は4歳メスのみの競走で、「さつき賞」、「東京優駿」、「菊花賞」は4歳オスメスのレースである。アメリカでは、「ケンタッキー・ダービー」、「ブリークネス・ステークス」、「ベルモント・ステークス」はすべて4歳オスメスの競走である。フランスでは、「ジョッキークラブ賞」、「パリ大賞典」は4歳オスメスが出場し、「凱旋門賞」は、4歳以上のオスメスがレースを行う。
- 19) 谷泰 1976 『牧夫フランチェスコの一日』 NHKブックス。
- 20) 松原正毅 1990 『遊牧民の肖像』 角川選書。
- 21) 小長谷有紀 1996 『モンゴル草原の生活世界』 朝日選書。
- 22) 原田煌 1995 『モンゴルの神話・伝説』 東方書店。
- 23) 岩村忍 1997 『元朝秘史』 中公新書31版。
- 24) ギンゴウの歌詞は、オヤチにより、様々なバリエーションがあるという。以下は、1996年調査時、A氏所有の競馬ウマの騎手からの聞きとりである。この歌詞に、独特の節を付けて吟じる。なお、日本語訳は、筆者によるものである。
 ギンゴウ（輝き美しい） アー ホー 慈悲深く オー
 アー ホー 慈悲深く 美しく オー
 アー ホー 慈悲深く 美しく オー
 大いに 粘り強く 美しく オー
 アー ホー 慈悲深く 美しく オー アー 美しく オー
 大いなる 知識 慈悲深く 美しく オー 慈悲深く 美しく
 オー ホー ホー 慈悲深く 美しく ホー
 （以上を繰り返す）
 光輝き 格好良い アーアー 人民のナードムの先頭を疾走す
- 25) 1頭の種オスが数頭のメスと去勢畜でサブグループをつくる形態。そこで生まれたメスは、種オスによって他のグループに追いやられ、父娘間で交尾が行われない構造になっている。そのサブグループがいくつか集合して、馬群となる。
- 26) 約40匹のウマが4グループに分かれ、上位4匹が決勝戦を競うという形をとった。
- 27) モンゴル国東部地域。チンギス・ハーンの出身地と伝承されている。「マンライ・オヤチ（第一のオヤチ）」というオヤチの最高の称号を持ち、ナードム組織委員会のメンバーであるD氏も、ヘンティー・アイマグよりウマを購入していることから考えても、良馬の産地として広く認識されていることと考えられる。
- 28) 1997年7月現在のレートでは、1円≒71gである。
- 29) 楊海英 2001 『草原と馬とモンゴル人』 NHKブックス。
- 30) 具体的な書名を示すものではなく、競馬ウマの鑑定に関する書物一般の総称である。
- 31) О.Намнандорж 1989 “Монголын Хурдан Морины Тухай”, Улсын Хэвлэлийн Газар, Улаанбаатар。
- 32) 1995年5月29日奈良県新公会堂において行われたシンポジウムにおけるセッション「遊牧騎馬文化とスポーツ」での発表。発表者は、当時内蒙古大学蒙古語文学系助教授ブリンバト氏。
- 33) 前掲12)。
- 34) 小長谷有紀 1991 「モンゴルの家畜屠殺をめぐる儀礼」『東北アジアの歴史と社会』（畑中幸子・原田煌）名古屋大学出版会 pp.303-333。
- 35) 小長谷有紀 1994 「狩猟と牧畜をつなぐ動物資源観」『資源への文化適応』（大塚柳太郎編）雄山閣 pp.69-92。